資料紹介

前田利為日記（一九一三年～一九一四年）一

梶原克彦
奈良岡聰智

目次

総論・解説
一九一三年十二月～一九一四年一月（以上、本号）

総論・解説

本論文は、前田利為侯爵（一八八五～一九四二年）の日記（一九一三年十二月一日～一九一四年六月六日）を翻刻するものである。まずは著者の人物像について簡単に紹介しておこう[1]。

前田利為は、旧七日市藩（富山藩、大聖寺藩と並んで、加賀前田家の御三家の一つ）知事前田利昭子爵の五男として生まれた（初名は茂）。幼少時から身体壮健、聡明で知られた彼は、一九〇〇（明治三十三年）一月、男子がなかった前田本家第十五代当主・前田利嗣侯爵の養嗣子となった。同年六月に利嗣が死去すると、家督を相続して、利為と改名した。一九〇六年には利嗣の娘・渼子と結婚し、翌年長男利建が出生している。

元来利為は政治家を志していたが、親権者である母朗子（利嗣の未亡人、鍋島直大の娘）の希望を受け入れて陸軍軍人の道を選び、学習院中等科を経て、一九〇四年六月に陸軍士官学校に入学した（第十七期、兵科は歩兵）。陸士第十七期の同期生で、後に大将まで昇進したのは、東條英機（のち首相）、後宮淳、利為の三名である。利為は一九一一年十一月に陸軍大学校（第二十三期）を卒業し、成績優等（三位）により恩賜の軍刀を拝受した。陸大の同期には、梅津美治郎（首席）、永田鉄山（二位）、小畑敏四郎、蓮沼蕃らがいる。この間、一九〇七年に少尉から中尉に昇進し（大尉への昇進は一九一五年）、一九一〇年には貴族院侯爵議員に就任している。

利為の陸軍軍人としてのキャリアで特筆されるのは、豊富な国際経験である。利為は、三回長期海外出張を行ってい

る。一回目は一九一三年八月〜一九一六年十二月で、当初ドイツに留学したものの、第一次世界大戦で日本の敵国となったため同国を脱出し、留学先をイギリスに切り替えた。このヨーロッパ滞在中、利為は西部戦線を含むヨーロッパ各地を視察し、多数の貴重な情報を日本に伝えている。二回目は一九二〇年二月〜一九二三年六月で、パリ講和会議に参加した後、平和条約実施委員、国際連盟軍事委員会の日本空軍代表、デンマーク・ドイツ国境画定委員日本代表などを歴任し、戦後処理に尽力した。一九二二年一月に平和条約実施委員を免じられ、その後の一年余は私費留学という形での滞在となったが、帰国間近に妻渓子を病気で失うという悲運に見舞われた。三回目は一九二七年九月から一九三〇年九月で、在イギリス日本大使館で駐在武官を務めた。この間ロンドン海軍軍縮会議が開催され、利為は日本の陸軍側委員という重責を担っている。この他一九一八年九月〜一九一九年一月には東伏見宮依仁親王に随行してイギリスに出張し、その経験を著書『皇華随班録』（一九一九年刊行）としてまとめている。

このように華やかなキャリアを歩んだ利為は、一九三三年に少将に進級し、陸軍大学校教官、歩兵第二旅団長、参謀本部第四部長、陸軍大学校校長と要職を歩んだ。一九三六年には中将に進級し、翌年第八師団長に親補されたが、一九三八年に参謀本部付となり、翌年予備役に編入された。利為の現役軍人としてのキャリアはここで終わったが、その後一九四一年十二月の太平洋戦争勃発によって、利為の運命は大きく変わった。元来利為は開戦に反対であったが、戦争が始まると公務に復帰し、第一線で働くことを強く希望した。その結果、一九四二年四月に応召され、ボルネオ守備軍司令官に任命された。利為は勇躍現地に赴き、任務に邁進したが、同年九月五日、ボルネオ沖で戦死した[2]。享年五十七歳であった。

利為は、青年期から亡くなるまで四十余年にわたって日記を書き綴っていたという[3]。利為の伝記『前田利為』『前田利為（軍人編）』では、この日記がふんだんに活用され、貴重な記述が多数引用されている。しかし残念ながら、これまで日記原本は公開されておらず、研究に活用されることはなかった。このたび筆者のうち奈良岡は、前田家当主である前田利祐氏のご紹介を頂き、所有者である公益財団法人前田育徳会の特別のご許可により日記原本を閲覧させて頂くことができた。奈良岡はかねて第一次世界大戦勃発時の在ドイツ日本人について研究しており、同時期にドイツに留学していた前田利為の活動にも関心を抱いてきたが[4]、日記原本を一読して、伝記に引用されているのは日記のごく一部であること、日記はほぼ毎日書き継がれ、貴重な情報が多数記載されていることが分かった。そこで、まずドイツ留学時の日記の中から一冊を選定し、奈良岡および梶原の共同作業により全文を

翻刻することにした。本日記により、第一次世界大戦前の日独関係、ヨーロッパ情勢、在ドイツ日本人の動向など、多くの未知の事実が判明する。前田育徳会をご紹介下さった前田利祐氏、貴重な日記の閲覧・翻刻を特別にご許可下さった前田育徳会に厚くお礼を申し上げる。また、筆者（奈良岡）に前田氏をご紹介下さった大久保利恭氏、翻刻で助力を頂いた森靖夫氏、安藤陽子氏にも感謝申し上げたい。

日記の内容に入る前に、一九一三年に前田利為が留学した経緯について簡単に解説する。

当時日本陸海軍のエリート軍人は、尉官時代に欧米先進諸国に留学するのが常であった。利為も、陸軍大学校卒業後にドイツ留学を決意した。利為は当初フランス留学を希望し、フランス語を重点的に勉強していたため、官費留学は難航したが、結果としてドイツに私費留学することになった。利為が名門前田侯爵家の当主という特別な立場にあったため、陸軍当局は留学に際して格別の配慮を行った。利為の留学には家従の逸見知久が随行した他、旧加賀藩出身の林銑十郎少佐（陸士第八期、のち首相）、蓮沼蕃大尉（陸士第十五期、のち侍従武官長）も同時期にドイツに私費留学することが許された。林、蓮沼の留学費用は、育英事業の一環として全て前田家が支出した。両者は、利為の留学中相談役的な役割を果たし、さまざまな形で利為を手助けすることになる。陸軍の最高実力者山県有朋元帥も利為に期待しており、留学前に利為と三回面談し、種々助言を与えた。

一九一三年八月二十八日、利為の一行は東京の新橋駅を出発し、京都を経て、翌日に神戸港を出港した[5]。一九一六年十二月二十五日に帰国するまで、三年三ヵ月にわたるヨーロッパ留学の始まりであった。乗船した船は日本郵船の加賀丸で、門司、上海、香港に寄港した後、インド洋、紅海、地中海を航行し、フランスのマルセイユに上陸したのは十月十八日であった。一行は、同地で出迎えた在ドイツ大使館二等書記官の鮭延信道と共にベルリンに向かい、翌日フリードリヒ通り駅に到着した。駅では、杉村虎一駐独大使（加賀藩出身）、陸軍駐在武官の河村正彦大佐、海軍駐在武官の佐野常羽中佐らが出迎え、杉村大使の案内で、ウンター・デン・リンデン（ベルリン中心部の大通り）のホテル・アドロンに入った。この時、随行してきた蓮沼は、一行と別れてワイマールに移った。

利為は当初、林、逸見と一緒に、ベルリンのバルバロッサ通り三十二番地の三階に下宿していたが、その後シェーネベルク地区のクーフシュタイナー通り八番地の家具付きの簡素な家に、逸見と共に転居した。本論文で紹介する利為の日記は、この転居の時期から始まっている。以下同日記には、語学学習、ドイツ社会との交流、オーストリア視察旅行、日本人社会との付き合いなど、様々な事柄が綴られている。これらの内容に関する解説は、次号以降に譲ることにしたい。

【凡例】

なお翻刻に際しては、以下のルールに依った。

・適宜段落を整理し、句読点や中黒を補った。

・漢字は原則として新字体を用いた。

・〔　〕および［　］の記述は、編者が付したものである。

・判読不能な語句は□で表記した。

一九一三（大正二）年十二月

十二月一日（月）雨

朝来雨模様にして蔭冬の鬱陶敷を味ふ。

本日を以てBarbarossastrなるPensionを去り、Kufsteinerstrに一家を求めて之に移転す。『旅衣解き初めし宿の名残かな』。住み馴るれば陋屋も懐しくして去るに忍びざるものあり。滞在中忠実にかし事へしEmma、殊に愁然として一行を送る。午前十一時に来るべかりし荷物運搬車延引して来らず。為す事なくして午後四時に至る。『引き越しや御主人手持無沙汰なり』の句さへ湧出せらる。

予は林少佐と午後一時立ち出づ。出づるに当り、女将に謝礼として鎌倉彫烟草函を贈る。彼女欣々然として贅弁甚だ勉む。

館前に記念の写真を撮る。Ardel女将、Emma給女を館前に佇立せしむ。

昼食をV.L.Pに認めて、新宅に至れば荷物車来らずして逸見は新宅の女将と交渉難戦中にあり。新女将は旧女将にも勝りて悪擦れ女なり。

徒然の余り再びBarbarossaに帰へり、住み馴れの三階に新聞など繙く。

日暮れて漸く荷車来る。即ち予の孤杖を曳いて佐野伯宅方面に散歩し、六時半頃Kufsteinerに至る。荷物到着せし処なり。書斎に入れば芳香衣を襲ふ。之れEmmaの贈れるものとは後にて知れたり。実利主義の独乙女には珍らしき優しき心掛なり。

荷物の整頓を大抵にして食卓に集まり、老川よりの蕎麦、寿司に転宿を祝ふ。

新女中Martaも八時頃に来る。

林少佐も本日を以て別居をなす。

一家を有して事物匆々心も落かざるに、夜も更けたれば軈て床に入る。午前一時なり。

十二月二日（火）曇

天曇り気温比較的暖かなり。

午前九時半起床。

午前十一時半より二時間語学を学ぶ。

午后二時、老川と同道、V.L.P午餐の后、家具店、布店等に寄り、寝具、鉄器など求め、帰途Fredrick Restaurantに夕食

を認め、Auto に乗りて帰へる。
入浴后、語学など復習。午前一時就寝。

十二月三日（水）曇
午前九時起床。
午前十一時より二時間語学を学ぶ。
大使館より本日の議会傍聴如何との電話かゝりしを以て之を快諾、午后二時大使館に赴く。重光書記官の案内で外交団傍聴席に臨む。アルザス、ローレンの武官暴行事件に関し反対過激党員の論談中にあり。傍に大宰相及陸相など肩を列へて座す。議長の率直熱心なる体度は可なり。過激党の人格の卑下なるは何国も仝じこと、覚へたり。
午後三時半辞して Linden Restaurant に昼食を喫して帰家。
入浴后、語学など自習す。
午后八時日本の服を着て Jacobe の許に赴く。晩餐を Jacobe 夫妻及子息と共にし、食后骨牌など弄し、十二時半帰家。
就床前、小一時間語学自習。

十二月四日（木）晴
午前八時半起床。暫時座禅を試む。
午前十一時半より一時間半、語学を学ぶ。
午后一時半、V.L.P に到り、永田鉄山と会し、本半日を伯林案内に費やす。

先づ VLP なる Wein Restaurant に午餐を喫したる后、地下電車にて Scharlottenburg〔Charlottenburg〕なる Königlich Schloß に到り、君徳婦徳共に高かりし Louise 皇后及普国中将の明君 Willhelm I の霊像を参拝す。荘厳なる霊殿に停して古往の歴史を偲び、面前生けるが如き永眠の像を拝する中は、感慨無量なるものあり。蕭寂たる冬枯の Schlossgarten に歩を移して逍遥之を久うし、軈て電車にて普仏戦捷記念塔に昇り、建立主旨の賞讃すべき点、国民教育上生ける教訓たる点に関し、永田と感慨之を同うす。
偶ま夕刻普露談に、忽ちにして黒雲天を蔽ひて到り、豪雨衣を湿す。即ち Willtheise 勧工場に逃げ込み、漫歩の后、Kempinski にて晩餐を喫す。
食后、Circus Schuman に曲馬を見る。曲馬よりも胆を寒からしむる軽業、愛らしき小大の舞踏、色彩の聞き分けなどの方感興を引く。就中海豹の諸芸を演ずるにいたりては大に人目を驚かすに足る。后段は例の大仕掛にて Tango の舞踏あり。
帰途 Bierhaus に冷麦酒を傾けて帰へる。
入浴后、就寝せしは午前二時半。

十二月五日（金）曇
蔭冬の風物暗澹寒気亦稍加はる。
午前九時半起床。午前十一時半より一時迄語学を学ぶ。

午后一時半 W. Freiherr Wolff von Gudenburg の家に昼食に赴く。本日より一週に六日間、一食宛食卓を共にすることに定めたればなり。
夫人も至って親切、三女の中、本日は二嬢あり。Erna を姉とし、英語に長じ、妹を Therese（Tea）と云ふ。愛嬌に富む。食卓には其外和蘭より某伯夫妻、一女及其家庭教師を加へて賑かなりき。
午後四時帰家、勉強。
午后八時 V.L.P に夕食。
午後九時より十二時迄机に向ふ。
母上様及渓子に手紙を認む。
午前一時就寝す。

十二月六日（土）曇　雪降る
飛雪紛々たり。初雪と称せらる。
午前九時半起床。
午前十一時より一時迄語学を学ぶ。
本週来るへき内地よりの通信今に来らず。待遠しき感あり。渋谷大尉及蓮沼より通信ありしのみ。転宅せしにより遅刻せるものと見へたり。
午後一時半より四時迄 Freiherr von Gudenburg の家にあり。午餐后、家の系図を聞き、又談陶器に移る。男爵秘蔵と称する支那陶器を示す。
午後四時帰宅。勉強六時半、茶菓を喫す。Marta に Kartoffel の菓子を製らしむ。
午後八時 Jacobe 夫妻と Deutsches Opernhaus に本夜の劇 Manon Lescaut を見る。筋書は簡単なるも、人をして仏国十六、七世紀の華奢なる生活を窺ひ知らしむるに足る。Manon の獄吏に捕はれて遠く加奈陀の異郷に沈淪するの状、人生栄枯変転の理も思はれて哀しなり。
帰途 Adlon Hotel に晩餐を喫して帰へる。
日誌を認め終はりて就寝せしむ。午前二時半過ぎなり。

十二月七日（日）曇
午前十時三十分に来るべき教師、十二時に至って来る。独逸は決して一般に時間を厳守するの美風を欠く。
語学の勉強、三十分にして廃す。
午後一時 Jacobe の家に招かる。Kümmel 及某美術博士と共に午餐の饗応を受く。至つて叮重なり。食後の談話は主として美術に関することなり。Jacobe 夫人□□□□□□の Collection を示す。面白きものなり。然れども之を東洋趣味の印譜に比すれば劣ること万々たり。
Kümmel 頻りと前田家蔵品の優秀を説明す。加賀美術の他国と彩色を異にし、一頭地を抜けるを以て他日加賀美術に関する印行をなすべしと切望し居れり。
午後四時三十分帰家。入浴后、勉強。午後七時 Gudenburg の

家に夕食に赴く。主人不在。婦人客二人連あり。食后閑談一時間にして帰へる。Guden 家に滞留せる和蘭伯爵の調子抜けたるか国民の魂とや云ふべし。
午後十時より少し勉強の后、旅行中の葉書の整頓などなし、一時半就寝す。

十二月八日（月）曇
午前九時半起床。
午前十一時より正午迄語学自習。
午後零時半より一時間、ice palace に於て氷滑を試む。
午後二時より Gudenburg の許に昼食に赴く。食後、Erna と Halma を試む。
午後四時半より二時間 Neumann に語学を学ぶ。
夕食は V.L.P に於てなす。
午後九時半より河村大佐の講話あり。
【河村大佐第三回講話】
1. 食卓上の諸注意（英語、敬語の類）
2. 社交上の諸注意（手袋、途上人に会するとき）
3. Planmäßig（使用人を少くすること、電話を節用すること）
4. Zabern 事件及其所感
1. 独逸宰相及陸相の意気の確乎として不抜なること
2. 社会党は斯の如き小事を捕へても政府に迫りて風波を求めんとすること
3. 諸領土統治上の好模範たること
4. 国会の権能と大権との関係明かにして、政府の威信は堂々として動かざること

然り Zabern 事件の解決は吾人の見て以て快とし、独逸憲法の特質並に王権の神聖なるに羨むものなり。之を我帝国の現状に鑑むるときは切歯扼腕に堪へざるものあり。政府は稍もすれば採るに足らざる巷説流言の為に動き、独乙に比して更に大権の神聖なるべき日本帝国が動もすれば憲政擁護の美辞に動かされて大権を移して下政党の群れの手に左右せられんとす。宜しく正に矯正すべき事項とす。
午前二時就寝す。

十二月九日（火）雨
午前九時より三十分座禅を試む。
午前十時より一時間自習。
Jacobe より書簡来る。林少佐之を読む。
昼食には Gudenburg の処に赴く。
午後四時半より一時間語学を学ぶ。
睡気を催す。明白に午後疲労を覚ゆれば語学は亦午前に実施せざるべからず。午後六時半佐野伯夫妻来訪。
午後九時、亦 Gudenburg の家にて食事す。Erna は不在、Tea は父母の中間に座して betorothal〔betrothal〕よりの恋文を取

り換へては愛読し居れり。日本とは人情風俗異れば異るもの哉。
午後十時半帰家すれは、内地よりの通信来り居れり。
渓子、高木、広瀬、孝成、東保、南部、小原正恒、渡辺錠太郎等よりなり。高木よりは明年画題のこと、大道叢誌のこと、陸軍大学旧藩人軍部卒業生あること、天谷の身分等に関する件を連ねあり。別に文展画帖を送り来る。
広瀬よりは辞典三冊を送り来る。
広瀬、前田、東保に返書を認む。

十二月十日（水）雨
近頃運動不足の為め胃弱を催す。依て午前の勉学を廃して市中散歩。Espranade〔Esplanade〕に於て理髪をなし、Leippzig str.〔Leipziger Str.〕str に買物をなして帰へる。
午後一時半、Gudenburg の処に午餐に赴く。
午後四時帰家。待てども待てども語学の教師来らず。独逸人の時間を守らざること、約束を違へて省みざること驚くべし。
午後七時半、又 Freiherr の処に食事に赴く。Potsdam より親類来り、食卓賑ふ。食事、Erna、Tea 等とトランプなどなし、十時過き帰家す。
渓子及高木に宛書簡を認め、午前二時半就寝す。

十二月十一日（木）晴后雨
午前九時半起床。
午前十時より一時間語学勉強。
十一時半、永山〔田〕大尉を Barbarossastr. 54-55 Ⅲ Stashe〔Stasche〕方に訪問、少時談話す。
正午頃より一時間半程、ice palace にて scate〔skate〕の稽古を試む。佐野伯より昼食準備の電話をかけられしには意外なりき。
V.L.P にて昼食の后、Alt Berlin の陳列場を見物す。名は百年前の伯林市の光景を展覧するにあるも、実は Weinachs〔Weihnachts〕贈品物の売店なり。
午后五時より一時間半、語学を学ぶ。
午后七時半、諸井書記官の家に招かる。此度和蘭に転任の留別会なり。佐野夫婦、棚橋夫婦、穂積学士同席。
午後十一時半帰家。
就寝は零時半。
借家主婦、本夕無断来訪。下女と喧嘩せしと云ふ。不届至極の姿なり。

十二月十二日（金）曇後雨
午前八時半起床。三十分座禅す。
午前十時半より一時間語学を自習す。
午前十一時半より Schlittschuh を携へて ice palace に至り、一

時〔間〕半程運動をなす。
午後一時半 Gudenburg の処に昼食に赴く。
午後五時より二時間語学を学ぶ。
午後八時、Jacobe の処に至り、英国人 Jassel 氏と共に晩餐の饗応を受け、食後 Bridge を試み、午後十二時、雨にぬれて帰家す。
家婦陋黠、本日老川と面会して有ること無きこと縷々贅言を弄す。老川軟骨、唯々として其威に服するもの〻如し。腐〔不〕甲斐なきものと云ふべし。

十二月十三日（土）晴后雨
午前九時起床。
十時より一時間自習。
十一時十五分より一時間語学を学ぶ。
十二時半、永田大尉来訪。相携へて佐野伯爵を訪問し、昼餐の饗応を受く。
独逸陸軍大尉 Georg Kowalski と話す。食后、伯爵夫人の世話をなす。家庭教師の弾琴あり。
午後四時帰宅す。
夕刻語学勉強。
夕食より VLP に赴く。
夜、勉強の后、Album〔Album〕に旅行中の絵葉書など挟み、午前一時半就寝す。

十二月十四日（日）雨
午前九時半起床。為めに座禅廃止。
午前十時半より一時間語学自習。
午前十一時より二時間語学を学ぶ。
午后 V.L.P に昼食。Silber Sontag〔Silberner Sonntag〕なれば来客多し。
午後三時、永田大尉と豪雨を衝いて森鼻軍医を訪れ、相携へて本荘大尉を訪問す。種々有益なる経験談ありし中、予の為めに特に参考となるべきは語学修学の初期は日本人により読書力を養成するの必要なること、隊附は成るべく晩期を可とするの二件なり。
午後七時半、Gudenburg の談にて晩餐を味〔ママ〕。男爵の友人夫婦来訪。食后写真を撮る。
午後十時半帰家。復習をなさず、其儘就寝。時正に午前零時四十分。

十二月十五日（月）雨
午前八時半起床。三十分座禅す。
午前十一時より二時間語学を学ぶ。
昼食は Gudenburg の処に於てす。
最初の内は家内親切に世話し呉れしも、今では外々しきものなり。
逸見を伴れて Deutschbank に英正金銀行よりの為替を組換へ

に赴く。
午後七時半、佐野伯の所に赴く。諸井書記官送別の為め、佐野、河村及予と三人して宴を張れるなり。
午後十時半散す。予は河村大佐とZoo BHFに赴き、篠崎少佐帰国を送る。其後永田、浅田、森鼻三人、古荘大尉の教導にて伯林夜景視察に赴く。
先づJoachimstr.なるAltes Ballhausに伯林人士舞踏歓楽光景を見る。曽てmikadoにありし少年もあり。爾後Unter〔den〕rinden〔Linden〕に帰へりてFledmaus〔Fledermaus?〕に伯林上流人士喫茶歓楽の状を視察す。軽球投げ合ひなど無邪気なる騒ぎに夜を更かすの状、変はれば変はる人情なり。午前三時半、夜雨粛々たるの時、帰家す。

十二月十六日（火）雨
午前十時起床す。
午前十一時半より一時間半就学。
午后二時、V.L.P.に昼食の后、Leipzich str.〔Leipziger str.〕に麻ハンケチ、化粧なおしなど、内地への土産物を買ひ求めて帰へる。
午後八時、林少佐とV.L.Pに晩餐を共にしつゝ、要談をなす。当伯林各種日本人の予に対する意見の区々にして其間に廻られし策動、並に女性に関する問題なり。
午前一時就寝す。

十二月十七日（水）雨
午前九時起床。
西原、藤井両中尉の陸軍大学優等卒業の祝詞及湯浅少尉の砲工学校優等卒業の祝詞を贈る。
午前十一時半より一時間語学を学ぶ。
昼食には逸見を伴ひて日本倶楽部に赴く。久々にて日本料理を味ふ。鼓腹以て帰途につきしを消化極めて早し。
午后五時諸井書記官を訪問し、和国赴任の前途を祝し松雲公の伝を与ふ。
午後七時半、Gudenburgの家に至り、夕食を喫す。一、二日疎遠にせし為め家内の者機嫌をとるに汲々たり。
午後十一時頃帰家す。寒気を感ず。

十二月十八日（木）晴
午前九時起床。
午前十一時半より一時間語学勉強。
林少佐来り、筒井の斡旋、河村大佐の乗気に関して報ずる所あり。家族生活は佐野中佐周旋の□最も撰ぶ所なり。
午後二時、B.PなるBeer Restaurantにて昼食。
食後棚橋半蔵を訪問す。北海旅行談など語り、午後五時半に至る。
午後六時帰家すれば筒井大尉来訪、暫く雑談の后、相携へて筒井大尉のFamirie〔Familie〕に至る。吉岡騎兵大尉も来訪、

主人始めの親切なる接待に思はず時を移して午後十二時帰家す。

十二月十九日（金）曇
今日は寒気強し。窓外の寒暖計零度を示す。
午前九時起床。朝食後、一時間自習。
午前十一時半より一時間半、語学を学ぶ。
午後一時半より昼食にGudenburgの家に赴く。娘の花婿来伯せり。
午後四時、ice palaceに佐野伯の茶に呼ばる。本日scate clab〔skate club〕入会の手続をなす。交際の為めの好機会作為場なり。
午後六時、永田大尉の処によりて帰へる。
杉村大佐、本日旅行先より帰伯。土産に仏産の柿を贈らる。
筒井大尉来訪。本夜の訪問を明日に延ばすことを語り、説明付の土産を落掌す。
夜食をV.L.Pに於て行ひ、食後は専ら勉学す。
内地より渓子、大津、天谷、川島甚兵衛、高辻子爵等より来翰あり。大津に絵葉〔書〕を投し、渓子にクリスマスの画葉を送る。
午前一時就寝。

十二月廿日（土）曇
午前八時三十分起床。
午前十時より一時間自習。
午前十一時半より一時半迄語学を学ぶ。
午食をV.L.Pに於てし、食后ice palaceに氷滑をなす。始めて単独場内を一周す。
午後五時帰家。語学を自習す。
午後七時半、V.L.Pに晩餐を喫し、帰へる。
筒井大尉あり、共にWartburgerstr〔Wartburgstr〕に訪問、午後十一時半帰家す。Bonzani

十二月廿一日（日）曇
午前九時半、Jacobe訪問。夫人と共にKaiser Wilhelms Gedächtnis Kircheに至り、耶教と人民との関係を視察す。堂内の建築、勿論伯林屈指のものにして壮麗なるも、儀式は楽器、合唱を交へて稍Oper式なり。僧の説教亦余り感心せず。要するに我仏教、殊に禅堂提唱の光景の森厳荘重なるに比する時は同日の論にあらず。参集の庶民、上下を通じて百人にも余るべく、之を我国目下の如く人心の矯正を等閑視するものに比すれば万々なり。
本日寒気強し。午前十時半、Jacobiの家に帰へり、午前中は□□□□□□を弄し、夫人のTannenbaumの設備など見る。
午餐后、日本絵画集の収蔵法を視察し、三時半帰家。稍腹痛

の模様あるに付き、仮床に就く。
林少佐 Weimar より帰来し、蓮沼の情況を報告す。
午後五時半頃、杉村大使来訪す。
午後八時、大使館に至り、河村大佐と共に大使の日本食の馳走に預かる。老川、Jacobe 始めの Weinachten〔Weihnachten〕の謝礼の議を相談し、又新年に至り、予の旅行すべきこと及明春家庭生活に入るべきこと等を相談す。
午後十一時半帰家。Weinacht〔Weihnacht〕と贈物の詮議をなし、午前二時半就寝す。

十二月廿二日（月）曇
八時半起床。一時間自習。午前十一時十五分より二時間語学を学ぶ。
午后三時、V.L.P に於て昼食の后、ice palace に於て運動一時間にして帰へる。
夕刻腹合充分ならず。仮床に就く。
午後七時半より Gudenburg の処に食事に赴く。午后十時半帰宅。
佐野伯及杉村大使に電話をかけて、明日鍋島公使の通伯の時刻を尋ぬ。

十二月廿三日（火）曇
午前六時起床。自働車を駆って Friedrichstr. BHF に赴く。蓋し和蘭の鍋島公使夫妻、今度帰朝することゝなり、仝駅を通過するを見送るが為めなり。伯林の習慣に泥みたる生活には午前六時の起床は稍困難を感ず。
午前十一時半より一時間半語学を学ぶ。
午後三時、昼食を V.L.P に喫したる后、ice palace に運動をなし、午后六時より又一時間勉強す。
夜、Gudenburg に食事す。令息の士官候補生帰家せるに面会す。優雅なる青年なり。午后十時帰宅。写真を貼付し、Marta を合〔相〕手に会話をなす。

十二月廿四日（水）雪
朝来吹雪あり。地上白雪の薄化粧を見る。
午前十一時半より二時間語学を学ぶ。
Jacobe に和意勿破典（Weihnachten）の晩餐の招待を辞するの書簡を認め、又 Gudenburg の家庭及 Jacobe 夫人、Neumann 等に夫れ〳〵Weihnacht の贈品をなす。
午餐を V.L.P に於てし、帰途、林少佐を訪問す。所謂伯林百首なるものを見る。其矮馬に自然土を踏みたるの状を吟せんとして名作なきの状を察し、予は下の拙詠を作せり。

　泥濘路却って靴に蘇情あり
注に曰く、伯林の街衢良道坦々普く石材を以て畳む。我靴軟土に渇して枯色あり。本日矮馬の僻邑に於て計らず天然路を踏む。泥濘に遇ふて却って喜ぶの情あり。茲に於てか此の句

たり。
午后七時、Smoking Coat を着用して男爵の家庭に和意勿破典の晩餐に赴く。食前に家族各人の贈品を一室に陳列したる処に導かる。衆人各其贈品を見て、且謝し、且喜ぶ。予の贈品は日本美術を代表せる織物及絵画にして、最も衆目の集まる処となる。
Tannenbaum は数十の蝋燭と数十条の銀線とに装はれて美容を室の一隅に顕はし、室内中々の陽気なり。食后快談に時を移し、午后十時半帰宅す。渓子より利建玩物到着の知せ、羽野知顕の安着消息の音信を落掌す。
午前一時床に入る。

十二月廿五日（木）晴
和意勿破典の祭に付き教師休暇を乞ふて来らず。
午前十一時より少しく自習。
正午、Freiherr の次男士官候補生 Eberhard 来訪。座談数刻の后、相携へて Kaiserhof Hotel に午餐を喫し、Unter den Rinden〔Linden〕を散歩して帰へる。至極温厚なる好青年なり。
午後四時より七時迄勉強の后、三十分許散歩。
午后九時、河村大佐来訪。雑談より独乙国民軍事思想の養成の長所等に就いて感想談あり。
午前一時就寝。

十二月廿六日（金）雨
今日も和意勿破典に付、教師来らず。
午前十時半、船越参事官を訪問す。近く厳父を喪ひ、帰朝せんとすればなり。山県辰吉氏にも面会す。
大使館に大使夫人の病気を見舞ひ、佐野伯、森を訪問してかへる。Georg Kowalski の娘も仝所にあり。頻りに氷滑の話などなす。帰途、帽を強風に吹ばし、自働車に曳かれて散々なり。
Grand Restaurant に午餐を認め、午后一時間許り仮眠す。
午后六時、雨を衝いて Dom にクリスマスの祭典を視察に赴く。端麗の堂殿火を点して盛なり。讃美歌、説教あり。午后七時退散す。
Weihnachten 和意勿破典の祭かな
午后七時半、日本倶楽部なる忘年会に臨む。集まるもの九十余名。盛会と称せらる。山本海軍中佐の挨拶、松嵜博士の答辞あり。食后大福引の賑ひあり。午后十時帰宅す。
Malta を対手に話などなし、午前一時就寝す。

十二月廿七日（土）雨
天候悪し。
語学の教師来らず。
午前十一時、Freiherr の令息を招き、旅行の相談をなす。
午餐を Grand Restaurant に於てし、食后 Hepig に新帽を購ひ、

Espranand〔Esplanande〕に理髪し、Aut Kulb〔Auto Klub?〕に佐野及河村と会し、共に佐野中佐独居の家庭を伯林郊外に訪る。寡婦の下に二男二女あり。至極平和なる家庭の如し。午后七時半、Freiherr の許に夕食す。今夕に Weihnachten の祝宴にて親族の者共十数名と混合す。紀念写真など撮る。午后十時帰宅。新年書信を認めて、午前三時に至る。

十二月廿八日（日）雨

午前中、内地に送るべき年賀状を認む。

【ドレスデン見物】

正午、Gudenburg の子息 Eberhard 来訪。共に小荷物を携帯して Dresden に旅行す。Haupt BHF の一等待合室に於て昼食を認め、午後二時廿分発汽車にて Dresden に向ふ。平曠三時間にして達す。

自働車を駆つて Europaische Hotel〔Europäisches Hotel?〕に入る。

入浴、晩餐前、市中を散歩す。人口五十六万の大都市街整然たり。伯林の雑沓と比して心地よし。王城、教会堂の建築物の荘重なる Elbe の清流の眺め好き旅情を慰むるものあり。Hotel に於て晩餐を喫したる后、附近の Kino を見物などし、十二時過ぎ就寝す。

Eberhard と談笑の中、何時しか夢路に辿る。

十二月廿九日（月）雨

Dresden 市中の見物なり。

午前九時半より十時の間に起床す。

十一時先つ王城を横に見て Operhaus〔Opernhaus〕の前を過ぐ。当地有名の Gemälde Galleria を見る。名画数多かりし中に Raffaello Santi の Die Sixtinische Madonna の古傑作物、Graf Pietro Rotari の Brustbild der Büßenden Magdalena の美貌、Gerard Dou の Der betende Einsiedler の緻密、活けるが如き、Karl Hoff の Des Sohnes letzter Gruss の悲壮、人を泣しむる力は特に眼前に髣髴たるを覚へたり。

次に Kunst Gewerbe Museum を見る。特に感心すべきものなし。

Museum für Altertum を見る。各種の彫刻物を陳列せるものにして一見の価あり。

Imperial Hotel に於て午餐の后、Park を散歩す。冬枯の樹間を生じて池畔を一周して帰へれば、時正に午后五時なり。

入浴后、馬車にて Kng. Schauspiel Haus に Hamlet を見る。曽て日本の帝劇に見たるものより実況を演出せり。午后十一時半帰館。晩餐。午前一時就寝す。

十二月卅日（火）雪

起き出づれば飛雪紛々たり。

午前十一時朝食を終へて馬車にて Historical Museum für Arms

and Pozelan〔Porcelain/Porzelan〕を見る。王家の武器の各種、陶器の参考品を陳列せるものにして中々結構なり。古武士の具足によりて中古欧州に士道を振興せし騎士の面持を窺はるべく、支那、日本の陶器を見ては東洋の美術、決して遜色なきに誇れり。

雪に馬車を駆って帰館す。汽車には時間あれば、附近の書籍店に旅行書を購ふ。店主磊落、予を呼ぶにDrを以てす。亦旅行中の一笑話となる。

Dresdenは画と陶器とを以て名あり。店頭是等美術品を陳列し、市の美観を添へたり。

午后二時廿分の汽車にて帰伯す。沿道六花野を蔽ひ、林を包むを麗はし。

午后六時我家にかへる。積雪三、四寸に及べり。午后七時半、河村大佐と同道、大使館に歳末忘年会に臨む。大使館員のもののみなり。

【河村大佐の訓談】

食后別室に於て河村大佐より訓談を聴く。曰く、目下の予の情況は半中尉、半侯爵にして甚だ不可なり。来年より向ふ一箇年は純然たる中尉を以て生活すべし、となり。大佐神経過敏、其訓示なるもの朝令暮改なり。先には自ら同意して此の家主生活を営み、自ら発案して武官交際を遠け、自ら注意して大使館出入を許容したるもの、今となりては悉く不同意の目標となる。殊に大使館出入は動もすれば大佐の嫉妬を買ひしもの丶如し。然れども予も亦自ら省みて貴族的たるの弊に陥らざるに勉めざるべからず。唯予は伯林に在住するが為めに此等勉強以外の悪評を招くが故に、将来遠く都会の地を離れて静かに勉強に移り、合せて大佐の所謂純然たる中尉を実行せんと欲す。

午後〔午前〕一時帰家。日誌を認めたる后、就寝す。

高木より一昨日書簡来る。山田病死のこと、小野木婚姻のこと等あり。

Jacobeより□の抄本を贈りて来たる。

浅井、井上より書簡あり。Emmaより附状し来る。

十二月廿一日（水）雪

午前九時三十分起床。

午前中年賀状など認む。

林少佐来訪。河村大佐と会見の結果を報告す。昨夜の予に対する談話と謂趣を異にする処あるも、之を要するに風なきに浪を起し、衆言を阻み、自己の意図を極端に遂行せんとするものにして、其言ふ処往々狭隘なる陸軍中等武官の見地を脱せず、深く顧みるに足らざるものなり。

斎藤少佐、井上友一等より書状あり。

正午、語学の教師来りしも辞むる。

筒井大尉居住の家庭の子息来訪。会見の上、墺国旅行の随伴となす。本人大に喜色あり。

昼食をB.PなるBeer Restaurantに於て行ふ。
午后再び林少佐、杉村大使と会見の結果を齎す。其言ふ所に依れば、大使と大佐との間には何等曽て意思の疎通せし形跡ある無く、大使は大佐の狭隘なる意見を一顧の価値なしとして深く自己の信ずる所を遂行するもの丶如く、則ち侯爵たるの位置を必要の場合、公然と立つべきものとなせりと。至当の言と云ふべし。
午后六時、Jacobeの所に至る。然る后、共に馬車にてBerlin Theaterに赴く。大雪の為、交通困難なり。既に積雪尺を超へしもの丶の如し。
伯林の児女等は昼より夜にかけて手橇を弄して雪中に遊び暮せるを見る。
Berlin Theaterに於ては〝□□□□　□□□□□□　□□□〟と云ふ喜劇なり。Silvesterの夜劇場に蝟集遊覧の客満場の盛なり。
午後七時、引き揚げてBrüstle〔Bristol?〕Hotelに晩餐を喫し、茲に新年を迎ふ。
夜更けて大正二年の年の最后の時計一転して新玉の年の初めに移るや、満堂の電灯を滅すること一分間暗黒の場内に荘重なる音楽を進行するを聞く。
昨冬禅林の鐘声に新年を迎へたる斯の年は事極めて多事にして終を伯林の熱巷に告げ、而して新なる年を荘重なる奏楽の声と共に迎ふ。此の年、いかなる運命を齎らして吾人を迎へしものぞ。異境修業の第一年、希はくは諸事吉祥にして為君国修養の所信を全うせんことを。

一九一四（大正三）年一月

一月一日（木）晴
伯林の繁街Brüstl〔Bristol?〕Hotelの華室に於て奏楽の裡に新年を迎へたる后、雪を蹶りて帰家せるは午前二時の頃なりき。
一旦就寝して午前九時起床。若水に身を清めて書斎に両陛下より拝領の金銀の玉盃を安置し、御両親の御尊影を奉掲し、謹んで新年の祝詞を奉り、皇室の御隆昌、家門の繁栄、一身の祈願を奉祷す。
午前十一時、老川、年賀に来る。尋いで林少佐も来訪す。酒盃を挙げて共に新年を賀したる后、車を仝うして河村大佐、Jacobi、佐野中尉を歴訪の后、日本大使館に至り、大使夫妻に新年の詞を申告す。
大使館別室に酒肴の準備あり。茲に於て陸軍同志の諸将校と会合、祝詞など交はす。
午后二時、V.L.Pに午食の后、帰へりて日本内地への年賀状を認む。関係方面夥多にして大に時間を要す。
午后四時、林、桂大尉、佐野夫妻来訪。尋いで杉村大使も年賀の為め来訪せり。

午后七時半大使の招待を蒙りて、大使館なる新年宴会に列す。主として外交官の範囲にして、之に在伯日本の名士若干を加へたり。食后、川瀬林学博士より独墺山林事業に関する話など聞く。
午後十一時半、松寺と共に帰宅す。松寺は不日、伯林を出発して海路帰朝すべきに付き、之に託して当地の模様、暗流などの紙筆に尽されざる所を伝言し、内地に報告せしむ。
午后十二時を過ぎたる后、床に入る。

一月二日（金）曇
一天曇りて積りし雪は容易に溶くべくも見へず。路上馬橇を走らせて悠々然たる遊客の三々伍々たるを認む。
午后十時、街頭に杖を曳いて新年画葉数十葉を更に求め来りて新年賀状の補足追加に筆を走らす。
昼食を V.L.P に於てす。
明日より Wein〔Wien〕方面に旅行するに当り、同道せしむべき Otto 来訪。兼ねて命じ置きたる旅行 Plan などを持参し来る。
正木歩兵少佐来訪。種々雑談をなす。
夕刻、柵橋を訪問して明夜の Beer 会の辞はりをなす。
午后七時半、林少佐と共に V.L.P なる Beer Restaurant に開催せらるべき陸軍団新年宴会に列す。河村大佐を筆頭として渡辺軍医正、吉村少佐、正木、林、川島、寺内の各少佐、林桂、古荘、筒井、秦、渡辺砲兵大尉、内田、永田、浅田の各大尉及担当官若干を集めて中々の盛宴なり。宴酣にして内田大尉と森鼻軍医とは尺八を弄して数曲を奏す。余韻嫋々として望郷の感を湧出せしむ。
午后十時過帰宅。明日の旅装を整へて就寝す。

一月三日（土）晴
午前六時半起床。旅装を整ふ。
午前七時、Otto 来訪。共に車を同うして Anhalt BF〔Anhalter BHF〕に至り、汽車に乗りて Prag に赴く。
汽車、Dresden に至る頃迄は仮睡を致して、昨夜の睡眠の不足を補ふ。
Dresden より汽車は Elbe の岸に沿ひて岳峰の間を縫ふ所謂 Sächsische Schweiz なるものにして、名勝の声広く欧洲に称せらるゝも、日本の風景に馴れたる吾人には少しも感服する能はず。殊に目下残雪散乱、寂寥の気 Elbe 一帯の山水を包むに於てをや。
汽車 Bodenbach に着して墺国官吏の税関の検査を受く。鞄を開せしめたるのみにて至って簡単なり。
汽車墺領に至ってより万般の風物不整頓なるの感を起す。殊に官吏、軍人の風来、体度に於て何となく秩序の正しからざるを感せり。
午后三時二十分、汽車は Prag に着す。直に旅館 Blauer Steen

〔Stem?〕に入りて行李を卸す。
Prag は Bohemia 王国の都にして、人口廿三万余人、Moldau の清流を枕して横はり、古趣掬すべきの小都なり。
小休の后、杖を曳いて Stadt Park より Museum の前を横り、主街を歩して Karls Brücke に出て帰へる。途上、随所に名所画葉書を求む。
帰館、入浴の后、再び街に出て Restaurant に晩餐を認む。
一般の風俗、伯林に比して緩和にして心地よきも、街頭の不潔、不整備稍目に付くを覚ゆ。
旅に労して午后十一時就寝す。

一月四日（日）曇
午前九時起床。
午前十一時より市中の見物をなす。
Carolinum は独逸一の古き大学を以て名あり。今尚残る一郭の建築物は1383以来のものなりと云ふ。
Teyn Kirche は古麗荘重の寺院なり。新教に比して神位の高きが如き感あり。
Old Town Hall の古時計は名物の一なり。
Karlsbrücke を設る橋梁の建築、宏荘にして両端の塔門を有し、欄干の処々に耶蘇の像を安置す。通行の旧教徒、其前を横ぎる如き額に十字を切るを見ても、旧教徒の風俗を順良ならしむること新教に勝るものあるを感ぜしむ。
Royal Palace を見る。700以上の宮室を有する大建築物なるも、今は荒廃に近く、余り感服もせず。宮庭の中央に立つ Dom は三十年の工事、未だに竣工せざるものにして結構宏大なり。
電車に乗りて Moldau 左岸の Prag の半市を貫通し、hotel garni に於て昼食を喫す。
午後三時、一旦帰館の上、行李を整へて Franz Josephs BHF に至り、四時二十分の汽車にて Wien に向ふ。
途中、Wien 宛の所信の未着を恐れて、入京駅名に関する電報を金谷大佐に投す。
車中に夕食を喫し、食后、Otto を捕へて諧謔に時を移す。言語の疎通不完全に、却って愛嬌あり。
午后十時前、降車。Wien の Franz Josephs 駅に入れば、金谷、阿部両武官、plathome に立ちて吾人を迎へたり。
自働車を駆つて Hotel Krantz に入る。第一流のものにして奇麗なり。三階なる浴室附の一室を求む。
金谷大佐の馳走となり、墺国酒に陶然酔を買ふ。
午后十一時、両武官退散后、Otto と近辺を散歩し、帰館の后、入浴。書信、日誌等に時を移して二時過ぎ床に入る。

一月五日（月）快晴
天気快晴なり。
午前九時起床。十時半、金谷大佐を私宅に訪問し、阿部少佐

も同道、墺国大使館に至り、西代理大使に面接す。
然る后、金谷大佐の案内を受けて維也見物をなす。
自働車を駆つてSchönbrunnなるKaiserl. Schlossに至る。途中、写真の膜板を購求するに時間を費やす。
Schönbrunn庭園に皇帝住宮の前庭を人民の為めに公開せらるゝものにして、仁徳普く賤民に至るものと云ふべし。国は広大、目下森冬枯の樹林寂しく並列すと雖も、晩春初夏の候は極めて鮮清なりと称せらる。唯欧式庭園の幾何学的無趣味なるは何時もながら吾人の感服せざる所なり。往く往く金谷大佐と墺国の現状、日本の風俗の退化等に関して語を交はしつゝ青丘上なるGloriett〔Gloriette〕望台に上る。天空広濶、遥か維也の西半部を双眸に収めて心地よし。
午后三時、Rathausに午餐を喫し、食后、国会議事堂、博物館等の重壮なる建築物を瞻仰し、途々金谷大佐に別れ、王城を通過し、主要市街を散歩して午后六時帰館す。
午后七時、Neulinggasse11なる金谷大佐の私宅に晩餐に招かれ、心入なる鯉の刺身と牛鍋の日本の料理に腹心を開いて快談す。

Blugaria〔Bulgaria〕の失敗と伊藤公の達見
日本の不秩序と政府の意見の薄弱
欧洲国交の鋭敏と日本対外思想の幼稚
など有益なる座談を耳にす。
金谷大佐、予の為めに在独中軍事研究上の必要なる諸問題を挙げて曰く、

1. 大軍の集中及開進法
2. 大軍の前進
敵と数日行程隔たりたる所より終に衝突に至る迄の体勢
3. 第二線集団の第一線に進出する要領
4. 大軍の方向変換、側面展開
5. 大集団を以てする攻撃の統一
6. 大騎兵団に対する作戦
7. 大軍を以てする追撃要領
8. 独軍建制の基礎
9. 独軍陸軍省の沿革
10. 独乙軍団編成の沿革
11. 独乙軍備拡張の歴史
12. 独、露、仏三国軍の軍団編成の利害、長短比較
13. 軍の編成に関する問題

午后十一時頃より維也の夜景を視察す。伯林に比して街頭暗く、繁昌ならざるも、魔婦の徘徊は頻繁なり。Barを見る。将校が軍服の侭、魔婦と戯語しつゝあるの状は到底独乙に見るべからざる所とす。
Bäcker str16なる当市の公娼所を視察す。尋いで踊場を見る。壮麗なる建築物なり。伯林と異なり、来客の自ら舞ふものを見ず。
午前二時帰館、就寝す。

一月六日（火）晴

午前十時半、Stephans Kirche を見る。四百年前の建築にして尖塔高く、天に沖して高壮なり。偶々本日は加蘇利克教の祭日にして群民参詣の者多し。

正午、国家議事堂前に阿部少佐と落合ひ、其案内にて先つ国家議事堂を見る。石材の広大なる建築なり。

Hofmuseum を見る。北なるは博物館にして亜米利加大とかげの模製、岩塩の大塊など目を曳く。南なるは美術館にして絵画、彫刻の見るべきもの多し。

Volksgarten に後脚立の乗馬軍神の銅像を撮影の后、王城の内を拝観す。

仏独のものに比して壮麗なるを覚へたり。

Restaurant に午餐の后、K.K.Prater に馬車を駆る。樹間の一直線道延長4000ｍを超ゆ。此の趣味なき一直線路こそ彼等の為めには馬車を駆るの無上の楽園となるものなるべし。

Donau の清流を一瞥して帰途に就く。途に浅草公園式人民の娯楽場あり。

午後六時、大使館を訪問。西代理大使と晩餐の后、K.K. Hof Operhaus〔Opernhaus〕に観劇に赴く。平田書記官夫妻も同席せり。劇は Carmen にして楽奏甚だ鮮美なり。Micaëla の舞姿、唱声最も美なり。最后の幕まで少女群集乱舞の風姿掬すべし。

午後十一時半帰館。

Otto と市中散策。Cafee〔Coffee/Kaffee〕を飲みて帰へる。日誌を認め、午前二時就寝す。

一月七日（水）晴

維也は風強きことあれど、滞在中晴天のみ続きて見物には都合よし。

維也市の飲用水の清冷なるは蓋し天下大都の無比とする所なるべし。此の市に於ては人造清涼水よりも寧ろ此の天然水を常用とす。遠く西方の山中より鉄管によりて導き来るものと云ふ。

本日午前十一時、先づ Stephans Kirche 寺院の高塔を挙〔攀〕づ。直立三百尺攀登し尽して市府を下瞰すれは蟻の如く、市の石の海の如し。

市中に旅杖を購ひたる后、K.K.Hof.Stailungen〔Stallungen〕に至る。墺国皇室厩寮にして納むる処の車駕五百台、繋ぐ処の馬疋三百頭に上る。其壮観目を奪ふ。八頭立の金色龍車を見ては誰か墺帝昔日の栄華に驚かざるものなし。車駕の重量四千屯を超ゆと称せらる。Ring str に杖を曳いて Rathaus に至り、歩を返へして帰館す。

午后二時、Hotel に阿部少尉と会し、今後の旅行計画を立てたる後、写真、地図、画葉など購ひ、Volk Prater に蠟作工物なと見て帰へる。

此夜七時より墺国駐在海軍 Atache〔Attache〕白根熊三（中

佐）の招待を受け、私宅に日本料理の馳走に預かる。金谷、阿部も列す。
座談は統率と軍制に移り、金谷大佐は監軍を設け、少くも封建時代に似たる将軍の関係を平時に於て結ぶこと必要なる旨を説き立てたり。
午後十一時半頃より Pari Dance に美妓の乱舞を見、盃を挙げて茲に散解す。阿部少佐と市中の夜景視察、16番を経て、二時頃帰館す。
□村大佐、河村、佐野両武官及敬義塾生に書を投ず。

一月八日（木）雪
午前十時、Hotel Krantz の払を済まして旅舎を出て、Süde〔Süd〕BHF より汽車に乗じて Kapfenberg に至る。晴天の維也は途中より曇りて終に吹雪となる。雪中岳峰の光景を眺めて、午後二時、Bruck BHF に着す。村瀬少佐及製鋼場技師一名出迎へに来る。蓋し此の行たるや Böhler Gulsstahlwerk〔Gußstahlwerk〕（製鋼場）の作業及 Erzberg 鉄山を見むが為めにして、我帝国が銃及砲弾原料の一部も茲より仰ぎつゝある縁因を有するを以てなり。
停車場より橇を駆つて Kapfenberg（活辺山）に至り、Hotel に小休の后、直ちに製鋼場を見る。溶鋼炉、伸鉄機、鍛錬機等の作業、之を枝光及呉の鉄工所を見たる吾人には少しも珍しからず。唯此の工場の特長とする処は木炭を用ひて石炭を用ひざるにあり。鋼の良質に至りては他に余り比を見ざる処なりと云ふ。
夕刻、会社常用 Restaurant に於て会社よりの馳走に預かり、画葉書及 Knife の贈品なと受く。簡なりと雖も心地より〔き〕待遇なり。
午後十一時入浴后、就寝す。

一月九日（金）雪
本日は鉄山を見るべき予定なり。Kapfenberg より登ること十里余より山は金山鉄塊より成り、堀土坑道の類なく、斜面を階段状に割取しつゝあり。極めて壮観なりとの言により、雪を侵して自働車に続くに橇を以てし、是非共本日午前二時半迄に視察を終はる予定を以て八時半、活辺山を発す。
飛雪紛々たる村道を駆ること一時間余にして Vordernberg に至る。茲に鉄鉱粗製場あり。此頃、飛雪益甚だしく、前路困難にして橇を以てするも夕刻に至らずんば山上に達せずとのことに□〔遺〕憾ながら鉄山の視察を中止し、唯素鉄の製法など見て、午食を喫す。
帰途、雪中の溝渠に自働車を曳き込め、思はず時間を要し、辛うじて Bruck 発予定の汽車に乗すことを得て帰維す。
維也に着すれは雨なり。阿部少佐出迎へに来る。共に金谷大佐を訪れて滞維中の厚意を謝し、Hotel Krantz に至る。
午後七時、西源四郎、金谷範三、白根熊三、阿部信行の四名

を招待して晩餐を共にし、滞維中の厚意を謝す。
午后十時十分、金谷、阿部両武官に送くられて維也を辞してInnsbruckに向ふ汽車来る。夜枕に二等客車に窮屈なる旅路の夢を結ぶ。

一月十日（土）雪
夜明くれば車は今しZellの古城附近を走れり。吹雪満地を蔽ひて一天陰鬱、雪峰氷河過ぎ来り、送り去る処の眺め蓋し偉観たるを失はず。
Salzburgを午前七時に乗り換へてより急行車となり、Werfen、Zell、Wörgel〔Wörgl〕を経て午後二時、Innsbruckに着す。車中仮眠にあらずんば雪中の山景を見とる、なりき。
陰子部落にては駅前のEuropa Hotelに行李を解く。
直ちに橇を雇ふて先づBerg IselにRegimental Museumを見る。主として戦争紀念武器、絵画の類を蒐集したり。
吹雪を衝いてAmras〔Ambras?〕古城を望みて、市の北端なるPanoramaに至り、内部を一見して馬首を回はしFerdinandeum Museumを見る。古器物、絵画、彫刻の類を陳列しあるも、余り感服せるもの無し。
市の主なる市街なるMaria Theresie通りを歩して画葉書など求めて帰へる。
陰子部落は陰川に臨むの小都にして人口五万を有す。四囲の高山、夏時は雪を載せて眺望佳絶なりとの称あるも、目下は吹雪に包まれて見る影も無く寂れたり。
此の辺田舎娘の美しきもの多し。
旧教盛にして村路上に耶蘇の尊像を掲げあること我地蔵尊像を里道に認むるが如し。而して信徒の其前を通行するや、必ず額に十字を切る。塩らしき感を吾人に興る。
市にHofkircheは古色壮麗、一見の価あるものなり。
入浴後、衣服を新めて、Hotel Tirolに晩餐を喫す。偶々此の土地上流社会の舞踏会あり。暫く停まりて舞踏の光景など見て、人情風俗研究の資となし、午後十時帰館す。
夜家郷、敬義塾、伯林及維也の西、金谷、白根、阿部等に通信、礼状など認め、亦滞りし日誌を整理して十一時就寝す。

一月十一日（日）雪後晴
陰子部落よりアルプス支脈の吹雪を衝いてMünchenに行くべかりし所、雪崩の為め交通杜絶せしを以て已む無く他路を以て独領に入ること、なす。
朝食后、雪の市中を散歩す。士官学校に至り、校内の案内迄乞ひしも、若しも公沙汰となりて事の面倒に及ぶを恐れ、中止して帰へる。
午后零時幾分の汽車にてInnsbruckを発してMünchenに向ふ。Kufsteinの辺、雪中の眺め面白し。
午后四時半、汽車Münchenに着す。自働車を駆ってPark

Hotel に入る。
入浴后、市中を散歩し、Hof Brauhaus〔Bräuhaus〕に至り、有名の麦酒場の光景を目撃す。南独人は親切なりと聞き及びしも、中々然らず。一兵士が一婦人と喃々麦酒を仰ぐ。前面に陣をとる。他に余席無かりしを以てなり。場内に埋もれて飲酒をなすもの無慮八百人にも余りつべし。老人あり。紳士あり。小児あり。婦人あり。雑然として社会の縮写図を見るが如し。
尋いで Bonbonniele の興行を見る。主として落語、舞踏、歌典なり。毫も興を感せざるも、以て当国人情の趣向を察知し得たり。Jango の舞振の如き如何にも下卑なり。当世人間の趣向の大勢も知られて慨嘆に堪へず。衣装の如き亦然らざるなし。隣席に二人連の若者あり。如何にも嫌悪の風体を以て吾人を迎ふ。不快云ふべからず。則ち席を改めて観劇、十一時半に至り起って帰へる。
夜街寒気強く、口髯の凍結するを覚へたり。午前一時就寝す。

一月十二日（月）雪
白雪霰々として寒気強し。路上呼吸の白く凍るを覚ゆ。
終日をかけて民顕の見物なり。
午前十時半、旅館を出て、先し〔ママ〕Schloß を見んとす。冬季は観覧を許さず。唯外郭を通覧して過ぐ。宏壮なり。尋いで Alte Pinakothek に至る。南独美術の白眉なりとの称あり。是亦遺憾ながら閉扉して見ること能はず。更に歩を移して Neue Pinakothek に至る。絵画の見るべきもの多かりし中に Arnold Böcklin の Spiel der Wellen と題する海神游泳の図の意匠と云ひ、色彩と云ひ、極めて感嘆を深めしものあり。其他猟人神獣に遭ふ図、樹間に兵士、佳人離別の画など何れも記憶に存する名画なりき。
尋いで馬車を駆って English Park を通り、Isar 川を渡りて Maximilianeum に至るも同じく冬季観覧の便なし。
Rathaus に午食を喫す。総べて Kellenerin にして旅情を慰むるものあり。
予は Otto に別れて単独 Schackstr. 2 II なる名誉領事 Schüssel を訪問す。夫人面接。茲にて寺内少佐紹介の木下正雄の居宅を承知し、同氏を尋ぬ。
午後四時より仝氏の案内にて Otto 共々先づ Deutsches Museum を見る。工業的博物館としては世界に名あるものと称せらる。
機械の模型、鉱坑の模型、蒸、電気機の沿革模型、度量衡の歴史沿革模型、天体観測機の歴史沿革及模型、電気応用諸機械、光線応用諸機械、磁気応用諸機械、交通、住宅、橋梁の建造、耕作器具より炊具、織巾に至る諸機械、飛行機の沿革、船舶の模型等苟も工業に関する一切の事物を蒐集して余す処なし。有益なるものと云ふべし。殊に観客をして自由に

機械の運転試験の便宜を与へせしあるは賞讃すべきことなり。家庭の慈母が愛児を伴ひて半日の清遊を此の館に採るもの多きを見る。蓋し好散歩場と云ふべし。地球引力の量を発見せし基礎となりし歴史的鉛球、汽車の沿革、飛行機の沿革、天体の模型、分子の運動、液体空気の諸実験等は殊に注意及興味を惹きたるものなり。

Luitpold に晩餐を喫す。此夜偶〔ママ〕の Festval〔Festival〕に相当し、本年は約七週間に亙る毎週月水土の三日は男女無礼講の夜会ありと聞き、社会学研究として麦酒 Saal に光景を観望す。見識なき男女が手を携へて舞踏、私語するの状、乱麻の如し。宜なる哉、秋季私生児の多き由なることを。我国の盆踊に似て一層野合的なるものと謂ふべし。

午後十二時過き帰館。日誌を認めて就寝す。

一月十三日（火）晴

午前八時十五分、民顕発急行列車にて伯林に向ふ。Hotel 出発のとき写真機の紛失せるに心付き、昨夜の Cafée〔Café〕に迄尋ねて行きて、為めに稍狼狽す。

民顕を発しての眺め一望、大波状地にして樹目〔木〕少く、大兵団運用に便なるの感ありしも、伯林迄640 km の行程を途中二個所に停車せるのみなりき。

午後五時伯林着、早速 Espranade〔Esplanade〕Hotel に理髪して、而して我家にかへる。

内地其他よりの書簡、品物、机上に堆積せり。夕食は林、□□及逸見と V.L.P に於てす。

母上様御始めより御年玉として御心入の御贈品あり。有栖川妃殿下より玉章あり。家職より年賀状あり。年末会計予算、決算の報告あり。知己、友人より年賀状あり。塾生より□□□の塾報あり。通読して深更に及ぶ。

一月十四日（水）晴

晴天なり。

午前九時起床。年始状の返へしに忙殺せらる。

午後一時、林少佐来訪。河村大佐の居宅に関する意見などの伝言を聞く。

Grand Restaurant にて昼食を喫す。河村大佐等あり。食后、正木少佐と共に Stick、靴を購求に赴き、帰途、観工場に財布など求む。

午後五時、河村大佐来訪。相変らず予の生活法を狭隘なる中尉のみに局限せんと欲し、自己以外、人の意見を傾聴することを防止せんとし、自己の権威下に置かんとする野心を包蔵せる令辞に迂曲の含む訓言あり。一も感服せず。言毎に反問追及せし為め、大に時刻を移し、結果、宮廷 ball の如き問題決着せずして午後八時、別る。

V.P にて夕食を喫し、夜は主として書簡を認む。維也、民顕宛の礼状等なり。

一月十五日（木）曇
午前、書簡を認むるに忙がし。
十一時、林少佐来訪。河村大佐訓示の誠意なきを語り合ふ。寧ろ窮屈なる陸軍に志を立てんよりは陸軍の身分を勇退して広く国家に貢献するの有利なるものあるを感ずるの念、愈々加はる。
午後三時、V.L.Pに昼食を喫し、食后、観工場にAlbam〔Album〕など求めてかへる。午後七時半よりFreiherrの家に夕食に赴く。相変らず和蘭地主夫婦あり。山本中佐も招せらる。
食後、遊戯などなし、十一時、帰家す。
夜、母上様始めに書簡を認め、午前二時就寝す。
高木より年末賞与、会計の説明等の書簡来る。

一月十六日（金）曇
午前十時半、老川と警察署に赴く。戸籍調査の為め呼出されたるなり。簡単にして五分間程対談の后、帰へる。姓名、職業等を問はれしのみなり。
午前十一時半より一時間、語学を学ぶ。主として復習なり。
午后一時、佐野伯を訪問せしも不在なりき。
Barbarossa32にAnderessを訪れ、写真を与ふ。Emmaにも与ふ。
V.L.Pに昼食の后、帰へりて旅装を解きて、室内の整頓をなす。絵葉書の整頓等に有利ならざる時間を徒費す。
午后七時半、林、逸見と大使館に招かる。篠野参事官及須藤、福士の諸氏会合。解散后、予は大使に対し、三月以降転居のこと、宮廷謁見のこと、内地に煙艸献上輸送のこと等の相談をなす。
帰家、又室内を整頓し、午前二時半就寝す。

一月十七日（土）曇
午前九時半起床。
午前十一時半、来るべきNeumann、十二時過ぎて来る。一時間、語学を学ぶ。
林少佐来訪。昨夜大使と予との対談の結果を河村大佐に移せし処、此度は非常に喜悦せりと云ふ。猫眼の如き変化哉。
Grand Restaurantに於て昼食す。
古荘と会合。DresdenよりWiesbadenの好適なることを語れり。
写真店に寄りて帰宅。勉強せんとして寸暇睡せしものか、午后七時半迄続きし為め、終に果さず。午後七時半、外出。観工場に逸見に銭入を買ひ与へ、V.L.Pに夕食し、帰途、林少佐の宅を訪問して帰へる。
午後十二時半就寝す。

一月十八日（日）曇
午前九時起床。
十一時、Neumann 来る。Jacobi に送る書簡を添削せしむるに、全時間を費やし、授業なし。
午後二時、佐野伯を訪問せしも不在なれば、V.L.P に昼食を喫して、亦再び訪問し、伯爵に面会して伯林以外に転居のこと、ice kulb〔Klub?〕のこと等に関し会談す、午後四時、帰へりて自習。
午後九時、散歩旁々食事に赴き、帰宅の後、逸見と謡など試み、后、予に対する批評談等に入る。談中、所感少からず。微を以て人を穿いず、徳を以て人を懐くるの道に出でざるべからざること、小事は挙げて人に委ね、着眼を常に大局に注ぐべきこと、仁恕の道を厚くすべきこと等なり。
午前二時就寝す。

一月十九日（月）晴
天気好し。
午前十時、林喜久松の案内にて逸見を従へ、舎利底なる解剖教室に福士医学士を訪れ、解部〔剖〕を見る。曽て日本の大学医科室に於て見たると特に異なる点なし。唯標本室に好標本の資料豊富なると、屍室、火葬室等、万般の設場行き届けるを異なりとす。教室廊下の学生外套掛の鎖あるは盗難を防ぐにありと聞き、大に風儀の良しからざるを感ぜり。
正午過、医科大学を出て、交通博物館を縦覧せんとせしも、本日休業の為め、去って独領阿洲物産陳列場を一見したる后、林を伴して Unter den Rinden〔Linden〕なる Keller に於て昼食の馳走をなす。
食后、Friedrich str. 辺を買物してぶら付き、午後五時、帰家す。
六時より語学自習。午后十時より十二時迄林少佐を訪問して四方の談をなす。
午前二時半就寝す。

一月廿日（火）晴
午前九時半起床。
七時半より二時間語学を学ぶ。
午後二時、Dresdener Bank に寄りて、ice palace に赴き、運動旁々食事を認む。
午後四時半帰家、勉強。
夕食は家に於て簡便に済ます。
夜九時半、三十分間散歩す。
輝道、木下、村瀬より書状あり。
永山、有田、小川に書簡を送る。

一月廿一日（水）晴
午前九時半起床。

午前十時半より三十分許、寒中の郊外散策。
午前十二時より二時間語学の教師と対談、主としてParsifalの筋書に就いてなり。
午后二時半、V.L.Pに昼食の后、ice palaceに赴き、四時半迄運動す。松崎博士、穂積、其他三、四の日本人あり。
午後六時帰宅。
夜八時、Freiherrの家に食事に赴く。
午後十時帰家。十二時就寝す。

一月廿二日（木）晴
午前九時半起床。
午前十時半より二時間独語を学ぶ。Numann綿密に過ぎて稍倦怠の気を起す。
午後二時、逸見同道、日本倶楽部に昼食をなす。帰途、ice palaceに寄る。Kowalskiの娘、愛嬌能く談話するに、終午後五時迄氷上を滑る。
午後六時より三十分許机上に向ふ。
今日は木曜日なれば内地よりの通信あり。年賀状も合せて十枚迄に達す。
午後七時半、林少佐を誘ふてWinter Gartenを観覧す。上村、山本等海軍の連中に会す。相替らず奇劇をなす中に支那少年の手品、洋人軽業の奇抜なる、最も興あり。仝所にて晩餐を認む。美味賞すべし。
午後十一時半、散解。帰途、Friedlich strの魔麗出没の光景を見て、午前一時帰宅。

一月廿三日（金）晴
午前十時半より二時間語学を学ぶ。近頃劇界を風靡せるParsifalの筋書の説明もなす。
昼食をV.L.Pに於てなしたる后、Esplanade Hotelに至りて理髪し、帰途、観工場に寄り、写真帖など求めて帰へる。
午後七時半、Gudenbergの家に夕食に赴き、九時帰宅す。
日本より続々書信到来。之れが返信に忙殺せらる。
太田定一の塾信、最も嬉しく感ぜり。

一月廿四日（土）晴
午前十一時半に来るべき教師、正午過ぎて来る。午后二時迄語学を学ぶ。
林少佐来訪。維也阿部少佐よりの金額のことに関して相談あり。
午後三時、V.Pに昼食の后、ice palaceに於て運動、六時帰へる。
維也旅行の写真出来ず。夜食は家に於て認め、食后、机に向ひ、一時就寝す。

一月廿五日（日）晴

快晴なり。

午前十一時半より一時間語学を学ぶ。午後二時、ice palace に赴き、運動。全所にて昼食す。日曜日は氷滑に来るもの少く、数四の独逸の小児、予を慕ふて争ひて手を携へて走らんとす。愛すべし。帰途、Neue See を見る。郊外氷上遊戯の繁昌驚く許かりの盛況なり。

午後六時、Neumann 来訪。本夕、Königl. Opernhaus に赴く為めに来りしものにして出発前約一時間に亙り筋書の説明をなす。

午後七時 Opera に赴く。Richard Wagner の Parsifal なり、三十年目の今年を以て初めて此の伯林に於て興行し得たるの呼物にして、過日来切符売切の盛況、本夕辛うじて其最後の晩に観覧するを得たるものなり。

音楽は Wagner 式にして其趣味解し難きも Gurnemanz（老騎士）を勉めし Knüpfer、及び Kundry を勉めし Leffler-Burckard の歌声は共に名物丈の価ありしを覚ゆ。Parsifal を勉めし Wien よりの Miller は過日 Wien にて Karmen を観しとき演じたる男にして、熟達せざる感あり。Parsifal の筋書は極めて宗教味ある荘重のものにして大に我趣味に合せり。殊に舞台の仕樹の見事にして森林の光景、魔園の変幼、聖盃捧持の場等の光景を現出すること巧妙、感嘆の外なし。

帰途、Rudolf Dressel に於て晩餐を喫す。卓上 Neumann と独逸現帝論に入る。予の帝を評して自ら用ふること多き過ぎ、帝徳に至りては先帝に若かざる旨を述ぶるや、彼其現況止むを得ざる旨を以て答ふ。一部人士を除く外、一般に現帝は尊敬せらるものと見へたり。独国不美人論を称ふれば彼亦偏理なる弁解を試む。要するに極めて快談たりき。

午後三時帰家。日誌を認めたる后、就寝す。

一月廿六日（月）晴

午前九時半起床。語学教師、遅れて十一時半、来宅す。一時間半勉学。

昼食を Grand Restaurant に於てす。陸軍の常客の外に吉井少佐、浅田大尉も見へたり。

Eis Palace に赴く。Club の使用時間なり。

午後七時半、筒井大尉の寄宅なる Wörpel の家に赴く。主人夫婦（Heinrich & Victoria）Otto Kuhnert Editha 及筒井歓待す。食后、予、準備せる旅行談を試み、旅中の写真など示めす。

午後十一時、別れて帰へる。

一月廿七日（火）曇

今日は Wilhelme II の天長節なり。明年よりは宮廷の情況も視察し得れば、今年は一般人民が如何に此の日を祝するかを視察せんと欲し、午前十時、先づ Wörpel の家を訪れ、夫人及娘同道して Wörpel の出仕せる中学校に天長節の儀式を見

る。
式の次第は先づ生徒の唱歌に尋いで生徒の口演、Wörpel の口演あり。次に校長は起ちて一場の祝詞を述べ、且皇帝より賜はりし書籍を優等学生に贈与し、更に合唱して独乙帝の万歳を三唱して解散す。
独逸の軍隊的思想は学校内にも能く進入し、校長の一令を以て座作進退する生徒の行動、誠に殊勝気に見受けらる。唱歌の真味は今日、此の学校に於て初めて解し得らる。合唱の間、一種鮮良の愛国心を鼓舞し得るものと見へたり。而して合唱も高調低音交到り、音楽的の美感あり。
皇帝が天長の佳辰に当り、普く全国学校に紀念品を賜はること、誠に帝徳を普及するの好適の所為と見受たり。
Wörpel の家にて朝食の馳走になりたる后、自働車にて一家族と共に Unter〔den〕Rinden〔Linden〕の天長節の光景を見る。人民群をなして宮廷城下に集ひ、疑〔擬〕声を揚げて英姿を拝せんと迫まる情羨ましきを覚へたり。時既に遅くして、軍隊奏楽の光景を傍観するなどの十分たりしも皇帝の自働車を駆つて散歩に赴かるゝの途を一□□□の際に仰ぎたり。Victoria Cafe に休息。帰途、其 Restaurant にも Worpel〔ママ〕夫人の紹介にて伯林大学生の祝宴の席上を視察す。盃盤狼藉の裡、一種乱れざる規律に見るは我書生の学ぶべき所なり。
午後五時半帰宅。
午後七時半、Freiherr に赴きしも夫人以下外出せんとする所なりしを以て中止して帰へる。VLP に於て夕食の后、Untr〔Unter den〕Rinden〔Linden〕の夜景を一覧して十二時帰宅す。
一時半、就寝す。

一月廿八日（水）晴
午後十二時半より二時〔間〕半、語学を学ぶ。
昼食は時刻遅れし為め、家宅に於てす。
午后、織田先生、平沼等より書簡到来。織田先生書簡中、本年御即位の大礼に際し、皇室の御事業として推称すべきもの、御意見記載あり。之れに感〔関〕する予の意見もあれど、他日を期して記述せんとす。要する〔に〕極めて同感、且敬眼の事項たり。
渓子より文通あり。利建の独乙軍鎧を着したる写真を合送し来る。
午後七時半、松下に於て開催の吉村少佐外二名の帰朝に関する送別会あり。陸海両軍の在伯者を合せて廿余名の盛会なり。
午後十一時半、散解。帰途、林少佐の宅に寄りて一時帰家す。

一月廿九日（木）曇
午前十時五十分より二時間語学勉強。
昼食をVLPに於てし后、ice palaceに運動。午后五時帰宅す。
林少佐、二月中旬の饗応に関し、河村と大使との意見の相違に関して服する処あり。結果、事円満に落着を遂げて、総て大使に任す。
午後七時半、大使館に赴く。笹〔篠〕野夫妻と共に大使夫婦の日本料理の馳走に預かる。午後一時退散。Untr〔Unter den〕Riden〔Linden〕に逸見と相会し、Corio〔Cario?〕に茶を喫し、事情を視察して帰へる。

一月廿日（金）晴后曇
語学を休業して内地への書信及語学の自習をなす。
午後三時、逸見と交通博物館に赴きしも時既に遅くして見ることを得ず。笹〔篠〕野参事館〔官〕の家に□を残して大使館に赴き、二月中催すべき饗宴に就き依頼する処あり。午后五時帰宅す。
少しく風邪の気味あり。五時より二時間程仮睡す。
夕食は家に於て認め、食后、語学の勉強、及渓子、金谷、阿部、村瀬等に書信を認む
高木よりの書簡に郷倉のことを記載しあり。恩を忘れ、主家に讐するの悪徒の天網粗なりと雖も、終に悲運に陥るべきなり。

一月廿一日（土）晴
午前十一時より二時間語学を学ぶ。Wörpelへの吊詞を認む。
午后、Espranade〔Esplanade〕に理髪し、帰途、ice palaceに立寄りて帰へる。
夕食を家にて認む。食后、蓮沼大尉来訪す。三ヶ月振にて倭馬の田舎より出掛け来たりしなり。
午后九時、老川の案内にてBallfestに赴く。Berliner Presseの主催にかゝるものにして、民間舞踏中最も見るべきものゝ由。賓客無慮一千名あり。但し婦人の見劣するは何時もながらの常態なり。富籤あり。予試みに曳き、十余本にして一冊の本を得たり。午前三時帰宅。

【追記】 本稿は、愛媛大学リサーチユニット「グローカル地域研究」（GLOCAS）、科学研究費補助金 基盤研究（B）「第一次世界大戦中・後の日中関係と東アジア国際秩序：対華二十一カ条要求の波紋」（研究課題番号：18H00825、研究代表者：奈良岡聰智、二〇一八年度～二〇二〇年度）による研究成果の一部である。

（1）以下の記述で特に注記のないものは、『前田利為』（前田利為公伝記編纂委員会、一九八六年）、『前田利為（軍人編）』（前田利為公伝記編纂委員会、一九九一年）に基づく。

（2）利為の戦死に関しては、前掲伝記の他、前田利建『北ボルネオに父、陣歿の地を訪ねて』（前田育徳会、一九八三年）も参照。

（3）前掲、『前田利為（軍人編）』五七九頁。

（4）奈良岡聰智『八月の砲声を聞いた日本人：第一次世界大戦と植村尚清「ドイツ幽閉記」』（千倉書房、二〇一三年）。

（5）以下ベルリン到着までの様子については、老川茂信「閣下の御高徳を偲びて―「滞独二十五年の思出」の一節―」（故前田大将追悼出版会編『梅華余芳』高岡県人社、一九四三年）六七～六八頁も参照。